

Title	大正デモクラシーと青年華族：三島通陽と劇団「友達座」を中心に
Sub Title	Taisho Democracy and younger members of the Nobility : viscount Mishima Michiharu and the Tomodachi-za theatre company
Author	内藤, 一成(Naito, Kazunari)
Publisher	慶應義塾福沢研究センター
Publication year	2012
Jtitle	近代日本研究 (Bulletin of modern Japanese studies). Vol.29, (2012. ), p.205- 240
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集：大正期再考 資料紹介
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10005325-20120000-0205">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10005325-20120000-0205</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

資料紹介

大正デモクラシーと青年華族

——三島通陽と劇団「友達座」を中心に——

内藤 一成

はじめに

「大正デモクラシー」という語はよく知られるように後世の造語であるが、時代を象徴する一種のキーワードとして広く定着しているといつてよい。『国史大辞典』によれば、「日露戦争後から大正末年にかけて、政治の世界を中心に、社会・文化の分野にまで顕著に現れた民主主義的・自由主義的傾向」と定義づけられている。デモクラシー的潮流の頂点は一九一八、一九九年頃で、世界史的には第一次世界大戦の終結、ヴェルサイユ体制の構築などに代表され、国内では本格的政党時代の幕開けを告げる原敬内閣が成立、東大新人会をはじめさまざまな社会運動団体が誕生し、新聞や雑誌には時代を謳歌する論調があふれた。伊藤隆の言葉を借りれば、

「大正八年前後は熱狂の時代であった。たしかに日本は変わりつつあったし、また変らねばならぬし、変ることができであろうと人びとに思わせるものをもっていた。そしてその変化を予感する雰囲気は「改造」やら「革命」やら「解放」やら、あるいはまた「デモクラシー」やら「社会政策」やら「社会主義」やら「共産主義」やら「無政府主義」やら「民族解放」やらの「言葉」となって人びとを興奮させた。そのためにさまざまな階層の人びとがさまざまな組織を作った」というものであった。<sup>(1)</sup>

華族に対するデモクラシーの影響は、従来、護憲運動や貴族院改革といった政治的分析、社会事業への取り組み、さらには白樺派に代表される文学者の言説などを通じて論じられてきた。その代表が「革新華族」としての伯爵有馬頼寧や公爵近衛文麿であり、「新しき村」を創設した武者小路実篤であった。<sup>(2)</sup> 彼らはたしかに華族とデモクラシーを考えるうえで重要な人物であるが、最年長の有馬の場合、『国史大辞典』という大正デモクラシー開始期の一九〇六年においてすでに二三歳、一九一九年には三五歳に達している。最年少の近衛でさえ、一五歳と二八歳である。個々の認識を単純に年齢で区分することはできないが、少なくとも彼らに対するデモクラシーの影響は成人後が中心であることは確かである。それせいもあってか、有馬の場合、デモクラシー状況への反応は、何より革命への恐怖であり、革新的行動の動機は革命の惨禍から自己と周囲の人々を救出したいという希求に根ざしていた。<sup>(3)</sup>

これに対し本稿で注目するのが子爵三島通陽である。我が国における少年団、ボーイスカウト運動に生涯を捧げたことで知られる三島は一八九七年生まれで、一九〇六年には九歳、一九一九年には二二歳と、まさにデモクラシーとともに成長した世代といつてよい。三島は、幼少期より文学、芸術に親しみ、土方与志・近衛秀麿・実吉捷郎ら学習院の友人とメーテルリンクをはじめとした演劇に熱中した。<sup>(4)</sup> 彼らの劇団「友達座」は一九

一七、八年頃発足し、活動が興隆期に差しかかろうとした一九一九年に突然、宮内省の干渉をうけ解散を余儀なくされている。友達座は、現在ではあまり知られていないが、河竹繁俊『日本演劇全史』（岩波書店、一九五九年）が、「ともだち座（一九一八年）は土方与志を中心とした学習院系の研究劇団で、山田耕筰作曲の「タンタジールの死」を好演したこと、後の築地小劇場を胚胎せしめた点等において注目されるべきものだった」と評価したように、近代演劇史上に無視できない位置を占めている。演劇面にもまして興味深いのはその多彩な顔ぶれであった。演出家、音楽家としてそれぞれ名をなした土方・近衛のほかにも、ドイツ文学者の実吉、音楽学者の加藤成之、フレスコ画家として知られる長谷川路可（龍三）、舞台照明家や舞踊家として活躍した岩村和雄などがあり、周囲の関係者を見渡しても小山内薫・山田耕筰（当時は耕作）・有島武郎生馬兄弟・秋田雨雀・与謝野晶子など錚々たる人物がいた。まさに友達座はデモクラシーにふさわしい顔ぶれと活動をもって、それもカオスの形で存在していたのである。

本稿ではデモクラシー世代の申し子ともいえる三島を中心に、友達座の活動を素描し、彼らが時代とどのように向き合ったのかを見つめることで、華族とデモクラシーをめぐる状況の一端をあきらかにしたい。主な史料としては三島家所蔵「三島通陽日記」（以下「通陽日記」）、および雑誌『TOMODACHI』第一巻第三号に発表された三島の手記「日記より（私―友達会―社会―のこと）」（以下「通陽手記」）による。なお特に断りがない引用はいずれも「通陽日記」からである。<sup>(7)</sup>

一 芸術への目覚め——三島通陽の少年時代

三島通陽（以下通陽）は一八九七年一月一日、子爵三島弥太郎の長男として東京市麻布区に生まれた。<sup>(8)</sup>父弥太郎は「土木県令」「鬼総監」などと称された子爵三島通庸の長男で、貴族院の最大党派研究会の最高実力者として、また第八代日本銀行総裁として活躍した人物である。母加根子は幕末の七卿落ちの一人として、維新後は陸軍中将となった侯爵四條隆譚の四女である。兄弟には弟通隆のほか、妹の寿子・梅子がいた。通隆は兄の影響から文芸活動、演劇活動をともし、梅子は土方与志の妻となった。

通陽は一九〇三年、学習院初等学科に入学した。身体はあまり丈夫ではなく病気で休みがちな子供であったが、一九〇八年、初等学科五年のとき叔父弥彦に連れられて観戦した一高対三高の野球の試合でファウルボール胸に受け、これがもとで肋膜炎となってしまった。三カ月の入院、さらに数年間の大磯での転地療養を余儀なくされ、学習院中等学科への進学は一九一二年四月であった。病気は少年期の通陽にとっては大きな事件であり、当時のことを回想した作品「錦華鳥」のなかで、「この十一と云ふ年になるまでは、体の弱かつたために、人一倍甘やかされて育てられて何の悲しみも知らなかつた私は、此病院に入れられてから、始めてつく／＼他人の冷淡、無情、慘酷、陰険と云ふことを味はされた」<sup>(9)</sup>と記している。具体的には、病院のベッドにひとり置き去りにされた寂しさを、とりわけ両親のいるときと、そうでないときとで対応に差のある看護婦への恨み言としてぶつけているのだが、愛情一杯に育てられた少年にとって大人の表裏はそれだけで傷つくには充分であった。病院のベッドや、東京から遠く離れた大磯別荘での日々は退屈きわまりないものであったが、そ

の分、感受性は鋭敏になった。病気体験が通陽の文学的才能に寄与した点について、有島生馬（白樺派、通陽にとって憧憬の存在）は次のように述べている。

一面から云へば君の病身だつたといふ悲しむべき不幸が却つて一種の羅針盤となり、や、もすれば剛慢に流るべき地位にある君をしてよい深い同情心を養はしめ、常に外物の誘惑に接触せねばならぬ君をして内観と自省を捨てしめず、権勢に乘じ安逸の眠に陥り易い境遇の君をして絶えず人道的な正義を憧憬せしめて来たその原因ではなかつたらうか？<sup>(10)</sup>

通陽はまた大磯での無聊の日々を紛らすために家族親戚や友人、知人に宛ててせせと手紙を出し、返信として各所から珍しい絵葉書を受け取った。<sup>(11)</sup> 通陽の絵葉書蒐集は生涯の趣味となり、その龐大なコレクションは「三島通陽関係文書」のなかでも異彩を放っている。<sup>(12)</sup> 通陽は驚異的な筆まめさから後年「ポストキング」の異名を得るが、その原点は大磯時代にあった。

通陽が文学への関心を高めたのも大磯時代であった。おそらくさまざまな文芸作品をむさぼり読んでいたと思われる。それらのなかには学習院の先輩たち、白樺派の作品も含まれていたであろう。<sup>(13)</sup> そうしたなかで創作意欲を高めていったのも自然であるが、通陽の文学少年としての最大の特徴は自ら文芸雑誌を創刊したことである。仲間同士の回覧雑誌ならよくあるが、通陽の場合、家が裕福なこともあり、『三光』という本格的な雑誌まで刊行してしまう。<sup>(14)</sup>

雑誌を発行したいという通陽の願望は、九〜一〇歳の頃までさかのぼる。<sup>(15)</sup> 彼はまず複写紙で作った『MM新

聞」を不定期に発表、大磯時代には謄写版印刷機を買ってもらい友人と『チェリー』という雑誌を月二回ペースで刊行したという。学習院中等学科に進んだ後は、まず土方与志（本名久敬、以下与志）と雑誌『山水』を、ついで一人で回覧雑誌『チェリー』を編集し、さらに一九二二年一〇月からは同誌を『三光』と改題の上、活版印刷によって刊行した。「三光」とは日と月と星の三つの光るものを意味し、三島の「三」にも引っかけたところがあるという。『三光』は子供の真似事とはいえないほどの本式なもので、「本会の目的は少年の文芸鼓吹するにあり」などとした規約を定め、同誌を編集する「三光会」を邸内に置き、会費の納入方法に応じて名誉・特別・正会員の三種を設け、毎月発行する『三光』に会員の作品を掲載することになっていた。創刊号をみると援助者である賛成会員には祖母和歌子や、叔父村井弥吉、叔母日野鶴子をはじめ三島家の親類が名を連ねており、名誉会員の筆頭には『山水』『チェリー』以来の同志である与志の名が確認できる。このほか近衛秀麿は第二巻第三号（一九二三年三月）から、実吉捷郎は第三巻第一号（一九二四年七月）から特別会員として名前が確認できる。

『三光』において通陽は、当初は「錦華」、一九二四年七月からは「章道」を名乗り、一九二六年九月には同誌に掲載した作品をもとに処女著作集『愛の雫』を刊行するなど文学への傾倒をつよめていった。与志も『三光』に戯曲や劇評を発表するなど、「三光グループ」とでもいうべき少年たちの活動は、相互の交流を通じて芸術的関心や能力を向上、増幅させていった。当時の学習院における彼らの様子は、与志が自伝のなかで以下のように回想している。「学習院の上級に進むにしたがって、いつか、音楽家になろうとする近衛秀麿君、美学を志す故岩村英武君、小説を書くとうする三島章道君や、その他二三の上級生や、私やが一群をなすようになった。当時学校では犬養健君やらを中心として「白樺派」の心酔者がグループをなしていた。私達のグルー

ブでは、三島を除いて、白樺派とは皆無縁であった。或る一部は永井荷風に私淑し、近衛はベートーヴェン一点張り、私は白樺一派の独善的態度を嫌悪し、文学としては谷崎潤一郎氏の作品を好んだ<sup>(16)</sup>。多様な芸術的関心をもつ三光グループが一つとなって取り組んだのが演劇であった。白樺派が席捲する当時の学習院にあって「友達座」は『三光』を母体に形成、発展していったことにより、その活動を白樺派の追隨にとどまらない、独自の光彩を放つものとした。

友達座は通陽・与志・近衛・実吉が四本柱で、さらにその二大支柱が通陽と与志であった。二人は友人同士であったが、その性格や関心はかなり異なっていた。土方梅子は二人について、「与志と兄〔通陽〕は仲好しでしたが、考えや趣味はかなり異なっていました。兄は白樺派や乃木希典学習院長に心酔していましたが、与志は白樺派の人道主義を嫌い谷崎潤一郎や永井荷風を好み、乃木式教育に反撥していました<sup>(17)</sup>」とちがいを語っている。この差異は、最終的には二人の生涯の進路を分かつことになるが、それはまだ先のことである。

## 二 演劇集団「友達座」の発展

友達座は、主として通陽と与志の共振の中から生まれた。与志の自伝によれば、当時、彼はストリンドベルグや、イプセン、メーテルリンクなど「無暗矢鱈に戯曲を読」み、「或る時、ゴルドウン・クレীগの論文集を読んで感激して、その劇芸術に関する対話を翻訳したり、劇場建築や演出全般に関する著書を読み始めた」といい、そうしたなかで「三島が主となって芝居をやるうという事<sup>(18)</sup>」になり、千駄ヶ谷の三島邸で武者小路実篤「わしも知らない」と、「ヴェニス<sup>(18)</sup>の商人」の法廷を演じたという。



「通陽日記」は一九一四年以降がほぼ残っているが、一九一四、五年は記述が薄く、また一九一七年分が欠けているため、現存する日記からは与志の回想に符合するような演劇は確認できなかった。だが、それとは別に一九一六年三月五日に三島邸で、家族や親類を観客に武者小路実篤「二十八歳の耶蘇」、森鷗外「なのりそ」を演じていることがわかった。このときはまだ友達座とは名乗っていない。

朝トコ屋へ行ッテカミ<sup>(髮)</sup>ヲワケテモラウ、土方来ル。ケイコスル。近衛来ル。サルコリー氏来ル。けいコスル。中食。清水輝子さん来ル。お客だん／＼と来ル。一条家、日野家、日高家、西村家、秋月家ノ人々モ来ル。岩村君モ来ル。二時頃カラハジム。三馬鹿デハ土方君ガ声ガ出ナクッテオカシカッタ。オーケストラ沢山アリ。松平康昌、康信、綾子さん等来リオーケストラニ加入ス。「二十八歳ノ耶蘇」悪魔一ハ評ヨロシ、十人デタ、オーケストラモアル。仲々ヨシ。金幣ガ一ツ一ツ写真ウツス、ヒサコ、キヨコサン、ウメコ、ト琴ノ先生トデ琴三絃の合奏アリ。又ソプラノ等モアル。「なのりそ」すみておべんとうを食ひ、こんどはさわぐ。チヨイトハジマリ等やる。だん／＼お客かへる。よつち<sup>(母志)</sup>ちゃん、岩村君一番しまひまでのこり英語マーチャントオブベニスをやる。

当初は「二十八歳の耶蘇」「なのりそ」以外に「ヴェニス<sup>(母志)</sup>の商人」も演じる予定であったが、上演直前の三月三日になって「父上（弥太郎）」の所ヨリヴェニス<sup>(母志)</sup>の商人ニ女ガ出テハイケナイトイハレタノデ大サハギ」となってしまった。代役を打診した相手にも断られ、見通しが立たなくなり、「たぶんヴェニス<sup>(母志)</sup>の商人はやらぬだらう。残念である」と日記に落胆の心情を記している。もっともこのときは日記をみるかぎりではどこまで

本式なのかはつきりしないが、「ヴェニスの商人」も一応上演できたようである。いずれにせよ女優問題はその後も彼らを悩ませつづけた。

友達座は通陽・与志・近衛ら三光グループの演劇への関心の高まりのなかで、結成されることになるのだが、「通陽日記」をみるかぎり一九一六年段階ではその名は確認できず、一九一八年日記では当初から演劇関係の記述が頻出した上、同年六月二五日条に「友達座の決算報告」「夜友達座の慰労会」という語が出てくることから、一九一七年から一八年初頭に結成されたものと思われる。劇団名は雰囲気からみて通陽の命名であろう。友達座による最初の試演は、一九一八年五月である。与志は自伝のなかで「先に述べた私達のグループは習院以外の人も加わって「友達座」という素人劇団を組織した。そして、芝の村井邸の食堂を舞台に、広間を客席にして、各メンバーの知り合いの文壇劇壇の先輩などを招待して、ヘッベルの『マリア・マグダレーネ』を上演した<sup>(19)</sup>」と述べている。

「通陽日記」によれば、叔父村井弥吉邸の食堂と客間を劇場として借りることが決まったのが一九一八年二月四日で、三月九日より同邸で練習を開始、「土方がすっかり夢中になって形をつけてるのが、一方にはおかしく、一方には感心した。少し独断すぎるなど思へる所もあったが総体に於て感心した」と感想を記している。上演は五月八日で、「通陽日記」には以下のように記されている。

午前村井家行っている／＼したくをする。クラ、が仲々来ないので心配して電話便声出したりして居たらやって来た。午後写真屋来り／＼の場面をうつす。土方が舞台かん督としてうつしてもらひたがりた。けいこはほとんど出来なかつた。有島〔生馬〕さんが花束を持って来て下さり暁子さんと奥さん

も来られた。堀口〔大学〕さんも来れた。だん／＼お客さんも来た。一幕目は大成功におはった。二幕目はクラ、が食たくをかたづけけるのを忘れ、自分とのせりふを一つつかへた。又自分は帽子を舞台にわすれ又戸をさかさにあけ様とした。岸田〔劉生〕君がほめてかへった。三幕目ぶじにすみ四幕目は自分がランプをひっくりかへした。しかし大成功におはった。

土方があいさつして役者がならんでおじぎをした。皆からほめられた。愉快であった。一人の失敗者も出さなかつた。上出来だつた。皆感心した。あとかたづけをして、みんなよろこびつゝかへった。自働車で実吉君をおくる。はこの中で清さんがほめてくれた。

友達座による試演はこの年の九月にも行われた。「通陽日記」によれば稽古は九月より本格化し、二九・三〇両日にニコライ・エウレイノフの「陽気な死」が上演された。観客の大半は招待客で来場者のなかには山本直光・秋田雨雀・岸田劉生・山田耕作・伯爵柳沢保恵・侯爵佐々木行忠・伯爵柳原義光らがあった。なお試演の直前の二二日には友達座展覧会が開催され、メンバーらによる絵画等が陳列されている。このあたり白樺派の影響が濃厚で、企画の主唱者は通陽とみてまちがいない。

### 三 女優公募問題と華族社会

一九一九年は友達座の活動が最高潮に達した年である。通陽は前年一二月よりヴェルサイユ講和会議の全権委員をつとめる叔父牧野伸顕の随員として渡欧し、そのまま三、四年ほど留学する予定であつた。<sup>(20)</sup>ところが一

一九一九年三月七日、父弥太郎が急死したため悲嘆のうちに帰国を余儀なくされた。通陽の帰国を機に友達座の活動は活性化し、彼もまた悲しみを紛らすため、次第に活動に力を入れていった。「友達座ではこの秋は一つ私演会、音楽会、展覧会それからモダウエルの『There of To-day』を各々が専門の所を翻訳して出版しやうぢやないかなぞと云ふ話になつた<sup>(21)</sup>」という。

ここで演劇史を確認しておく<sup>(22)</sup>、日本で西洋文芸に基盤をおく新劇運動が勃興したのは一九〇〇年代後半、坪内逍遙が主宰する文芸協会が発足した一九〇六年、二世市川左団次と小山内薫が自由劇場設置を発表した一九〇九年が起源となる。島村抱月・松井須磨子を中心とした芸術座が有楽座で第一回講演をおこなったのが一九一三年九月で、抱月の病死と後を追った須磨子の自殺を機に解散したのが一九一九年であった。新劇はいまだ草創期であり、友達座の試みは多くにおいて先駆的であった。

演劇活動の発展は、女優起用問題をいよいよ切実なものとした。当時の状況は与志によれば「『友達座』には男優は十分いたが、女優としては、秀しげ子氏や渡平民氏夫人（とし子）などがあるきりだった。当時にあつては、上流家庭でも、男の子の自由は多少あつても、女の子には芝居をするなどという自由は許されなかつた。そこで、このような特殊な人の集つた劇壇では、女優難は必然の事だった<sup>(23)</sup>」という。秀は女流歌人で芥川龍之介と深い関わりをもつことになる人物、渡の夫平民は劇作家、児童文学者として知られる。女優難は友達座にかぎつたことではなく古典的な課題であつた<sup>(24)</sup>が、華族社会は男女の交流、女子の言行にはとくにきびしく、先の「ヴェニス<sup>(25)</sup>の商人」試演の際、女性が舞台上上がることを禁止されたように、身近な範囲で女優をみつけることは至難であつた。

「通陽日記」によれば、最初に女優公募が話題になつたのは六月一日日である。二五日には「福沢舞台」と

いわれていた福沢桃介郎を借りる話がつき、二八日には女優募集の広告文の検討を行っている。

ソレカラダンダンミンナ集ツタ。近衛〔秀麿〕、加藤〔成之〕、土方〔与志〕、実吉〔捷郎〕、岩村〔和雄・英武〕、秀〔しげ子〕、松平〔康信〕、長谷川〔龍三〕。食事ヲシテイロイロ友達座ニカンシテハナシラスル。ソレカラ僕ノ宅デ土方ガ支那芝居ノマネモシタ。ソレカラ Theatre of Today ラミンナデ訳サウトイフコトニナツタリ、女優募集ノ広告ヲツクツタリシタ。

また六月三〇日条には、「夜、有島武郎、小山内〔薫〕、秋田〔雨雀〕、〔有島〕生馬夫人、〔山田〕耕作、同夫人、与謝野夫人〔晶子〕、斎藤〔佳三〕、同夫人、ベシイ、チェレミシノフ等ノ人々ガキテ、十一時スギマデ模型舞台ノコトデ大サワギ。耕作氏ノピヤノモヤッタ」とあり、友達座との関わりの深い文化人とのつながりがみてとれる。<sup>(25)</sup> 女優募集は七月一日『新潮』にまず掲載された。

#### 友達座女優募集

今回私達が友達座第三回試演を致すに就きまして真に劇芸術を愛される四五人の女の方々の御助力を願ひたいと存じます。私達と一緒にまじめにやつて見ようとお思ひの方は、どうぞ七月二十日迄に東京府下千駄ヶ谷七六二、三島章道宛にお知らせを願ひます。いづれ委細の事はお知らせ次第お伝へ致します。

友 達 座

岩 村 英 武

女優募集は、その後、与謝野鉄幹・晶子夫妻の紹介で『婦女新聞』にも掲載された。さらに『時事新報』

『都新聞』にも紹介記事が載った。『都新聞』記事には「四五人の本当に芸術を愛される女の方々の御助力を願ひ度いと存じます、私達も未だ舞台経験の浅い素人許りですが熱心に芸術を愛する人ならば素人で沢山です、只私達は創立以来日も浅く経済的の基礎も未だ固まつて居ませんから私達はその方々に劇芸術に対する真面目な気持をお与へする事ができる丈けで物質的には当分何のお礼も出来ませ<sup>(26)</sup>ん」とのコメントが載った。応募者との最初の面接は八月一日に土方邸で行われ、以後幾度か実施された。応募者には「第一に物質的のお礼の出来ない事。第二には役不足を云はぬ事。第三は稽古によく出る事」の三条件をはじめに断るなど、あくまで芸術を研究する仲間を求めるものとするスタンスが貫かれていた。<sup>(27)</sup>面接の様子は「通陽日記」八月一日条に以下

岩村	和雄
長谷川	龍三
加藤	成之
松平	康信
近衛	秀麿
実吉	捷郎
三島	章道
三島	通隆
土方	与志

のようにある。

カハッテイロイロシテカラ土方ノ所へ行ツタ。シバラクシテ成松トイフ女ガキタ。ソレカラツヅイテドン  
ドンキタ。都新聞ニ出タノデソレヲ見テ来タ人々ガ多カッタ。中ニハズイ分女中ノヤウナノガイタ。実吉  
ヤ近衛モ来タ。高橋サン御夫婦モ一人ツレテ来レタ。朝日ヤやまとノ記者ガキテ女優ヲシラベテイルトコ  
ロヲウツサシテクレト云ツタガソレヲコトワツテ四人ダケデウツシタ。夜ハモ<sup>(横型舞台)</sup>ケイブタイモミタ。

ズイ分ツカレタ。自働車ガムカヒニ来テカヘルマデ夜一人ノ女優ガクルトイフノデマツテイタガトウトウ  
コナカッタ。ソレカラズイ分サワイデ自働車デカヘル。

面接の結果、最終的に野中花子・白鳩銀子・白井菊世・小林富代をはじめとする女優十数名が採用された。<sup>(28)</sup>  
青年華族による女優公募とオーディションは、右「通陽日記」中の新聞記者の興味本位な取材ぶりからも窺え  
るように、すぐさま世間の噂になった。

「通陽日記」で関連記述を確認すると、最初は広告が出てまもない七月一〇日条で、名古屋方面に出かけて  
いた通陽のもとへ婚約者の松岡純子より手紙で「華族ノ人カラ大サワギダトノコト」との情報もたらされた。  
面接開始後の八月五日条には「麻布ノ〔純子の〕母上カラ手紙デ女優募集ノコトカラ父上〔松岡均平〕ガ考ヘ  
モノダト云ツテイラツシャルトイフコトヲキイタ。タイヘン気〔二〕ナツタ。僕ノ仕事ガ父上ノ主義ト違フナ  
ラ気ニナラナイノダガ、タイヘン曲解ヤ誤解ガアルラシイカラデアッタ。母上ニ長イ手紙ヲカイテ女優募集ノ  
コトニカンシテ、クワシク申上ゲタ」と婚約者の両親の憂慮に胸を痛めている。松岡からは八月三一日に尋問

を受け「社会主義ヲドウ思フトイハレタカラ、社会主義ハシリマセントイッタ。武者サンノコトハイロイロベ  
ンカイシタ。只、イントンのノコトヤ共産的ノコトヤ、イロイロ氣ニイラヌ所ハ云ツタ。文学ヲ道楽ニサレテハ  
ドウカトイハレタカラ、ソレハ人モシダイデセウト申上ゲタ」などと話し合っている。松岡の懸念からは芸術  
活動が左傾化することへの警戒がみてとれる。実際、「通陽日記」をみると、与志は「スラブ論」をさかんに  
説いていたし、<sup>(30)</sup>ほかにも彼らの自由恋愛主義や、文化人との交流（その中には左翼的な人物も少なくない）な  
どを考えれば、華族社会に波紋が広がったのも無理からぬところであった。そうした中で当事者であるにもか  
かわらず通陽の危機感は薄く、特段根回しや対応策を講じることもなく八月中旬から下旬にかけて軽井沢に避  
暑に出かけ、有島武郎や山本直光らと軽井沢夏期大学に参加するなどしている。後の事態を考えると、このあ  
たり、いかにもナイーブな対応であった。

友達座は九月一三日から福沢舞台で稽古に取りかかった。題目はメーテルリンク「内部」と武者小路実篤  
「嬰兒殺戮」中の一小出来事であった。ところが、この頃から報道の論調が事実と乖離した興味本位、批判  
的なものとなっていく。「通陽日記」九月一四日条では『報知新聞』『萬朝報』の批判記事に衝撃を受けていた  
ところへ学習院の先輩原田熊雄や与志から別の中傷記事に関する情報もたらされている。

原田サンニモアツタ。国民〔新聞〕ニ悪口ガカイテアルトイフノデ、カハリニカツテミタラ、オシロイヲ  
ツケタリ女優ヲヨシタリシテ名門ノ公達ガ時<sup>(時勢)</sup>セイモシラズニイルトイフヤウナコトガカイテアツ〔夕〕  
ノデイヤナ氣ガシタ。コッチノ芸術ニ対スルマジメサモシラナイデ外面バカリノミカタヲスル。夜土方カ  
ラ<sup>(電話)</sup>デンワデ毎日ニハ福沢ガ大将デ貞奴ガ先生ダトデイルソウダ。コッケイニモホドガアル。



『国民新聞』には「名門の公達等、紅粉を塗り、鬢を著け、女優を擁して演劇に熱す。又脚下に焰の迫れるを知らず。覚醒乎、抑も改造乎」との文言が躍り、『毎日新聞』はさらにひどく、「痴態に耽る華族の公達 是でも藩屏か」という見出しのもと「華族の若殿原が財界の高等幫閥福沢桃助に唆のかされ、白井菊世、小林富代、田村百合子と自称の女優志願者を集めて素人芝居の道楽稽古に取菟つた、場所は下渋谷の福沢邸で、本日下午一時から連日の努力だ、お師匠さんは言ふ迄もなく例の川上貞奴」と、誤認と揶揄に満ちた活動紹介をしたあげく「自ら皇室の藩屏を以て任じながら毫も国民の模範たるを想はず生温い面に白粉を塗つて狂言沙汰に没頭するが如きは言語道断の痴態である、斯の如きは殆ど是等特種の階級が無産者の多い国民に対して、一種の挑戦的態度に出ると斉しい」などと華族の体面を汚し、さらに階級対立を煽るものと非難している。川上貞奴との師弟関係は福沢舞台から派生した憶測記事の最たるものであり、さすがにメンパーもあまりのばかばかしさに、遠く名古屋にいる貞夫人から「近頃はやる催眠術の遠距離療法とか云ふ奴のやうに遠距離教授が出来るのかもしれない」などと千里眼的な超能力を引き合いに笑い合つたという<sup>(31)</sup>。新聞に中傷記事が出た段階においても、彼らは自分たちの行動は真に芸術を求めるものであつて何ら疚しいところはない、と動揺をしていない。

#### 四 宮内省の干渉

事態は九月一八日に急展開をみせる。「通陽日記」には緊張した状況が左のように記される。

午前有島サンへ行ツテエヲカイタ。午後一寸ヒルネシテ、芝居ノケイコへ行ツテミタラ大サワギデアツタ。宮内省ノソウシツ寮カラ中止命令ガキテ、ヤメネバ(謂)スルトイフノダサウダ。実吉君は父上トケンカスル氣ガナイカラ止メルトイフ。土方君ハミンナガヤレバドコマデモヤルトイフ。岩村ハ父上(ト)ケンカスルコトハナイガ、アツタラソレデモヤルトイフ。トニカク大サワギダ。自分ノハ牧野(伸顕)叔父上ヲトホシテクルトイフ。叔父上ニハ出来ルダケオハナシヲシテミル氣ダケンカスル氣ハ自分ニモナイ。コレカラドホシヤウ。千石(曲石)〔政敬 宗秩寮事務官〕サン(実吉ノトコロニ云ツテキタ人)ノトコロへ行カウカ、実吉ハケンカスル氣ナラユカヌトイフ。ゴハンゴミンナデ井上(勝之助 宗秩寮総裁)サンノ所へ行クコトニナル。先生シツカリタノミマスナゾト女ノ人々ニオクラレテ出テユク。ミンナハ大イキゴミデア(意気込み)ルモ、実吉ハ自分ガイテハミンナノ歩調ガアハヌカラ列外ニデルトイフ。男優ヲ募集シヤウカトイフ説モアツタガ、ソレデハ友達座ノ色ヲ出スコトガ不可能ダシ、ソレニ華族ハ人ヲヤトツテ芝居ハ出来ルガ、芝居ハ出来ヌ、カンゲン(換言)スレバ労働者ハヤトヘルガ、労働ハ出来ヌトイフコトニナルノハ社会問題上イケナイトイフコトニナツタ。イロイロノギロン(議論)ガ出タ。

宗秩寮は、皇族、王公族、爵位、華族などに関する事務を掌る宮内省の部局である。華族を監督する同寮が、処罰をちらつかせて活動を止めようとしたことは、友達座メンバーにとつては衝撃であつた。このとき与志は、演劇への傾倒をつよめていたことに加え、華族階級からの決別を密かに期していたこと(32)もあり、強行突破を主張した。「通陽手記」によれば「自分は舞台監督だから、皆がどこまでもやると一言云つてくれさへすれば、

自分は如何なる困難を排し、どんな犠牲を払ひ、どんなものを捨て、も大ひに君達とやる。自分は芸術至上論者だから、たほれるまでもやる。しかし皆がぐぢや／＼になつては舞台監督一人えはつて居ても張合がない」と発言したという。これに対し、通陽をはじめメンバーの大勢は、何とかしたいが、宮内省との正面衝突は避けたいというものであつた。華族社会は複雑に縁戚関係が絡まっており、与志のように決別までも覚悟しているならばともかく、周囲への迷惑を考えると躊躇はやむを得ないところであつた。

協議の結果、実吉をのぞく一同で宗秩寮に向き、井上総裁に自分たちの真意を伝え、結論はその上で決しようということになつた。女優に見送られ勇んで出かけていったものの井上には面会を拒絶され、この日は何ら成果を得ないまま帰るほかなかつた。<sup>(34)</sup>なお「日記」後半で、自分たちの出演は取りやめ男優を雇ひ芝居を行えばよいとする意見が出たことに対し、華族は労働者は雇へても労働はできないことになり社会問題上不適當であると反論しているあたりは、いかにもデモクラシー高揚期らしい。

会話が叶わなかつたことで彼らは方針を転換し、「名望地位のある人でどこかで我々の尊敬し得る人で、芸術に理解のある人で、我々に同情のある人で又或筋とも相当聯絡のある人を訪問し、先づ其人々の理解同情を得た上で、其人の得ざるである筋との了解をつけてみよう。それにはなるだけ広く各方面の方におめにかゝるといふことになつた。と同時に一方には、文壇の人々とか其他の有力者にも後援者を作らう」ということになつた。彼らもまた上流層に網の目のように張り巡らされた華族人脈や文化人との交流を使つて反撃に出た。

「通陽日記」で確認すると、九月一九日、通陽は、伯爵二荒芳徳を訪問した。二荒は、高等文官試験合格後、愛知県や静岡県に勤務し、一九一七年より欧州に出張した経歴をもっており、後援者としてはうってつけであつた。<sup>(36)</sup>その二荒からは「自分ノヤルコトヲサンセイシテ下サリ、若シ宮内省カラキレタトキハ弁ゴスルトノコ

トダツタ。単ニ武力ノミデナク、文化モ世界トタイトウニナラネバイカントイフ考ヘカラ、我々ノ芸術ヲヤルコトニ賛セラレタ」という。同じ日、与志と近衛は、有島武郎・生馬兄弟や社会運動家の加藤時次郎を訪問、岩村は小山内薫を訪ね、それぞれ助力を得た。また加藤成之は森鷗外を訪ね「モシ宮内省カラキカレタラ君達ノシテイルコトハワルクナイトイフ」との言葉を得たという。その後、全員で伯爵柳沢保恵を訪ね「大イニ同情」を得るとともに、井上総裁と面会してもらう約束を取り付けた。さらに、その帰途に外務省政務局第二課長であった子爵武者小路公共（実篤の兄）を訪ねたところ、おなじく宮内省訪問を約束してくれた。公共からは「君達ノ態度ヲ世間ニ弁明シアルトキハ罰ヲウケテモヤリトホセ」と激励された。公共はこの後、友達座と宮内省との調停役として奔走することとなる。

このほか二六日には、通陽は叔父の男爵牧野伸顕に面会している。「叔父上ハ我々ノ仕事ハミトメテ下スツタガ、アマリ社会ニワロツトヤツテ、ワカラズヤノ誤解ヲカツテモソソダカラトノ御注意デアッタ。自分ハ団体ノ責任ヲハタシタイカラ団体トモニ行動シタイトイッタラ、ウントイハレタ」とあり、老練な対応をみせている。「通陽手記」によれば、当時、友達座に対する同情、支援者としては今あげた武者小路公共・柳沢・二荒・有島兄弟・小山内・加藤・森のほかには伯爵小笠原長幹・伯爵柳原義光・子爵黒田清輝・長原孝太郎・邦枝完二等がいたという<sup>(38)</sup>。いずれも華族や文化、芸術方面の有力者である。

運動の効果はあらわれ、九月二一日、公共から電話が入り「宮内省デハムシロ文芸ノ研究ハシヨウレイシタイ位ナノダトノコトダ。只女優募集ガイカントイフコト、<sup>(場所)</sup>バシヨガイカントイフコト、切附ヲウルノガイカントイフコトデ、シカシ芝居ヲスルノニハ女モイルカラ、小サクドコカデヤルノナライ、トイハレタソウデアアル」との調停案がもたらされた。メンバーのなかでは与志が最強硬論者であり、舞台監督らしく福沢舞台からの変

更不可ににこだわったが、だがその与志ですらも動揺は隠せず翌二二日、上野で妻梅子とともに通陽・村井弥吉と会った際には、「加藤ノ祖父〔泰秋子爵〕、祖母〔福子〕ニナイテトカレタ」と閉口の旨を漏らし、叔父弥吉からは「主義ノタメニスルノニ青クナツチャダメデスヨナゾ」とたしなめられている。後に爵位を捨てる与志をはじめでの試練は相当こたえたようで、九月二五日に通陽・岩村兄弟と相談した際、「遂ニ土方君モ宮内省ノ要求ヲイレ、一先ツ女優ヲカイサンシ、又地所モ他デヤラウトイヒダシ」ということになった。

「通陽日記」九月二八日条には、村井弥吉邸借用のため皆で交渉に出かけたときのことが記されている。日記には、事態は深刻であるにもかかわらず、どこか暢気な青年華族たちの風貌がよくあらわれており、はからずも時代の雰囲気までも見事に表現されている。

朝友達座ノ人々ニ集ツテモラツテ弥吉叔父上ノコトヲハナシ、オメニカ、ラウト思ツタガオルス(留守)トノコトデアッタ。ミンナデ十一時ゴロデ、叔父上ノ所へ行ツタラオルスナノデ、新橋ノ東洋ケン(軒)デ食事ヲシテ、ソレカラ蒲田〔三島家別邸、稽古場として利用〕へ行ツタ。野中サン、ヨサ(与謝)ノサンナゾガモウキテイタ。ダンダン人モアツマツタノデ whising, rase ヤ Sigalette, rase ヲヤツタリ、ハンケチレーズヲシタリシタ。ナカナカ面白イ。ソレカラ庭ヲグルグルマハツテカヘリ、トランプシタリ、トウトウ武藤サンハ三味線ヲヒキダシタ。白鳩サンモヒイタ。夕方解散。

夜トウトウ亭(陶々)ノ支那料理へ行ツタラマダヒライテナイノデ、天金(天鵝籠)デテンブラヲタバ、叔父上ノ所へ行ツタ。ウントイロイロハナサレタ。友達座ガアマリ強クナイトイハレテ、ミンナ困ツタ。

トニカク叔父上ノ所(都合)デハツゴウガワルイシ、九州クラブハイケナイシ、土方ノ天幕モ面白クナイトイフノ

デ考ヘルトイフコトデオ別レヲシタ。

村井は当初、友達座の面々に同情的で、前日、通陽以下が面会したときには「自分ノウチヲカシテヤラウ、又出来ルダケツツパツテミナケレバヤカン」などと激励していた。その後、何らかの圧力がかかったのか、日記の要領を得ない様子からも窺えるように、借用話は頓挫してしまい、さらに他の思案もうまくいかず、結局当初の予定どおり福沢舞台でいくことになった。

## 五 友達座の解散

女優募集が新聞で騒動となつてから約半月、宗秩寮の干渉が入つてから一〇日余り、九月二十九日は友達座にとって重大な一日となった。この日はまず『東京朝日新聞』に「宮内省の干渉で「友達座」解散さる」という記事が載つたことでメンバーの間に動揺が走つた。そして、この日ようやく宗秩寮関係者との面会が実現した。「通陽日記」には当日の緊迫したやりとりが記されている。

朝日新聞ニ我々が宮内省ノコトデ解散ニナツタトデテイルノデスツカリ心配シタ。朝ミンナ集ツテイロイ口相談シ、トニカク舞台ハ福沢ノトコロデヤルトイフコトニシテ武者サンノ所へ行キ、ミンナデ宮内省へ行ツテ仙石〔政敬 宗秩寮事務官〕、福岡〔秀猪 宮内省御用掛・宗秩寮所属〕ノ二子ニアフ。芸術ハ悪クナイガ、世間々々トイフ。殆ムド自分ガハナス。トニカクニケ条ハオイレシテ一ケ条ハコマルトガンバ

ル。仙石サンハイ、トイハレタガ福岡サンガイケナイトイハレ、武者サンガイロイロトリモッテ下サル。トニカク又才返事ヲキクトイフノデ引サガル。待カマヘタ新聞屋ニ質問サレタガ武者サンガカ、ナイデクレ、カクノナラ自分ノハナシトシテ、ミンナガマジメダトカイテクレトイハレタ。ソレカラ武者サンヲオ送りシテカヘル。土方、岩村来リスコシアソブ

宗秩寮へは公共の同行のもと、仙石政敬事務官と福岡秀猪御用掛を訪ねた。両名とも子爵である。「芸術ハ悪クナイガ、世間々々トイフ」兩名に対し、通陽を中心に談判を行い、女優の解散と切符販売の中止の二条件を受け入れたが、舞台の変更については拒み通した。仙石は了承したが、福岡は最後まで反対したため、結論は出ないまま会見は終了した。終了後、彼らは待ち構えた新聞記者に取り囲まれたが、公共がかばってくれた。動揺はなおもつづき、翌三〇日には、通陽のもとを実吉が訪ね、「友達座ノハナシスル。実吉ハ個人主義ダカラ、団体エハドウモハイレヌトイフ」として、友達座からの脱退を申し入れた。実吉は一八日以来すでに活動を自粛していたが、四本柱の一角が崩れたことはグループにとって打撃であった。しかも実吉は今回の演目の一つ「内部」の主役であっただけに、上演そのものが危ぶまれた。相談の結果、友達座としての活動はできないが、友情は変わらず「私交上は前の通り仲よしで、只団体から名だけぬけた。勿論大いに後援はしてくれ<sup>(39)</sup>」ことで決着した。

実吉脱退を受け、与志を中心に題目が再検討された。「通陽手記」によれば「内部」は実吉が主人公するものだったし、又新参の「群衆」をかなりレジスールがもてあまして居たのと、それから集めた女の人々を当然、をそかれ早かれ芸術的良心からも改革しなければならなかつたのとで、とう／＼「内部」はやれそうもなくな

つて来た。「中略」そして「内部」のかはりには与志が骨を折つて「メーテルリンク作」「タンタゼールの死」を選んだ。女の人が六人男はお爺さんが一人出るのである。爺さん役はその人にむいた岩村「英武」がする事になり、女の人の役割もきまつた。「嬰兒殺戮」は実吉の代りには長谷川にでも出て貰つてそのまゝ、やることにした<sup>(40)</sup>という。

演劇への情熱は依然消えてないようにみえるが、友達座はもはや満身創痍であった。与志は、友達座の前途にまったく悲観してしまつており、せめてもと一〇月一日、秋田雨雀を自邸に招き、「友達座がだめになつたので、「内部」のデザインだけでもみせたい」といつて中止となつた演目「内部」の模型舞台を披露している<sup>(41)</sup>。一〇月三日、友達座はついに解散し、芸術集団「友達会」として再出発することとなつた。これは演劇だけの集団から幅広い芸術研究団体をめざすというもので、友達座は発展的に解消された。

午後宮内省ニ出カケテ、仙石、福岡両氏ニアッタ。福沢サンデハドウシテモイケヌトイフ。サンザン議論シタガ、ヨースルニ平行線上ナノデ、トニカク自分一人デハ返事ガ出来ナイカラトイッテカヘル。〔略〕  
時間ニナツタノデ福沢家ヘ行キ女優ヲアツメテ解散ヲ土方ガ宣言シタ。ソレカラミンナデウチニ来タ(男連)、ソシテ友達座ハ解散ニシテ友達会ヲ組織シテ芸術界ニサツサウトイクコトニナリ、新聞ノキリヌキヲハツタリ、ギターヲヒイタリシテワカレル。

友達座は解散したが、メンバーは演劇をまだあきらめたわけではなかった。ただし宗秩寮との交渉はうやむやのままであつたことから、準備は目立たないように進められた。演目の一つ「「嬰兒殺戮」中の一小出来事」



は、主役通陽の多忙による練習不足に加え、出演者四人が急に出演不能となったことから「なまじつかのものを見せるよりは、これを出すのは中止にして、私も只単にマネージメントの方に全力を尽して、土方初め皆も「タンタジールの死」に全力を尽してやらうと云ふ事」<sup>(42)</sup>になった。音楽も近衛から山田耕作に代わった。最終的に旧友達座メンバーで演劇に関与したのは演出の与志と照明の岩村和雄、アグロヴァール役の岩村英武だけ、華族は与志のみであった。かわりに華族メンバーは間接的に支援することとなり、その一環として資金集めのための「友達会小品美術展覧会」が一月七日から三日間、千駄ヶ谷の三島邸で開催された。通陽が記した予告文によれば「同人は勿論のこと、其の他には有島武郎氏、同生馬氏、同夫人、与謝野晶子女史、山下新太郎氏、長原孝太郎氏、小寺謙吉氏、同夫人、斉藤佳三氏、布目敏行氏、津軽照子氏、高野武郎氏、山本直光氏、今純三氏、青木茂氏、佐竹義通氏、木下孝則氏、水谷川忠麿氏、白鳩銀子女史、チエレミシノフ女史等の援助出品がある筈でございます。なほ同日は私が巴里より持帰つた泰西名画の写真も少しく展覧する筈でございます」と、錚々たる出展者がうたわれていた<sup>(44)</sup>。

友達座を継承した友達会による試演「タンタジールの死」は、十二月五日より三日間、土方与志演出、山田耕作音楽により福沢舞台にて上演された。「九割は皆未経験の人々であり、能力の違ひや、様々の困難が起りまして、理解や統一の上に非常に苦しみました」という与志の苦勞は並大抵のものでなく、そのため彼は「各人物の箇々の性格——普通の場合でもこれは俳優によつて直接表現されるものですが——を第二義として——俳優の可能性に立脚して——最も安全な難のない温健な全体の統一と調和とにつとめ、演技に於ても子役をつかふべき、タンタジールの負擔を軽くしてこれに対するイグレーン、ベランジエール、アグロヴァールに多くを荷しました。そして各幕のリズムの貫流を握つて、それを淀みなく流す事に努めました」という演出法をと

り、山田耕作が今度のために作曲した音楽を前奏曲、間奏曲に使い「五幕を休みなく通して演ずると云ふ日本では新しい試み」をもって臨んだ。<sup>(45)</sup>

このときの試演に対しては、『TOMODACHI』第一巻第三号が「試演記念特別号」と題して特集を組み、観劇した文化人たちの批評を多数載せている。<sup>(46)</sup> これをみると与志の演出に対しては辛口なものもあるが概ね好評であり、とくに幕間なしで演じた手法は山田の音楽と相俟って高く評価された。例えば加藤時次郎は「併し各幕を通じて飽く迄も幽玄な神秘的な緊張を失はず舞台に少しの隙も見せなかつたところはなか／＼悔り難いもの」と賞賛している。秋田雨雀も好意的な批評を寄せた一人であるが、彼の日記には「夜、友達会（福沢邸）へいった。「タンタヂールの死」はおもしろかった。最後の幕は非常にエフェクトがあつた」<sup>(48)</sup>と感想を残している。俳優陣ではイグレン役の白鳩銀子に高い評価が集まつた。<sup>(49)</sup> ここでは亡命ロシア人の彫塑家で音楽家のチェレミシノフ女史の批評を紹介しておこう。ちなみに翻訳は友達座を退会した実吉である。

全体の調和が優雅に申分なく構成せられてゐた、ことは驚嘆に値する。殊にそれが素人によつて案配せられ演出せられたことを考へ合せれば猶更である。彼等の多くはヨオロッパにも曾てなかつたやうな人達である。彼等は純粹な共鳴と想像とを以つて全体を造り上げたのである。

役割も好く振られてゐた。さうして上手に演じられた。イグレンヌの気分が次第に昂まつて行く所も極めて精細な感じを以つて聡明に現はされた。妹もよく彼女を扶けたし、タンタヂイルもよく調子を合せてゐた。老僕アグロヴァルの難かしい役も非情にうまく仕遂げられた。舞台装置はその著しい簡素と色彩調和とに於て偉大であり美事であつた。電気装置も忘れてはならない。そのおかげで全体に対して印象の統

一が与へられたからである。音楽からはあらゆるものが生み出された。すべては一つの巧妙な筆触によつて描き出された一つの音画であつた。

実演その物にはいくらかの小さな欠陥があつた。が、それは先に云つた理由を勘定に入れ、ば実は爰に挙げることを許されない程度のものに過ぎない<sup>50</sup>。

さまざまなトラブルに見舞われながらようやく上演にこぎ着けたことは、友達会メンバーにとつて感慨無量であつたようで、最終日である七日の様子は「通陽日記」に次のように記されている。

三時頃カラ福沢邸へ行く。イヨイヨ最後ノ日ダ。今日ハオ客ハ五六十人キタ。最後ノ幕デ火ガキエナイノデモウ少シテ幕ニモエサウニナツタノテ白鳩サンガウマクケシタノデ、小山内サンハホメ、土方ハブツブツ云ツテイタガ、スツカリスンデミンナキゲンヲナホシ、夜ノ二時ゴロマデオドリクルツタ。Fancy ballニナツテシマツタ。小山内サンガヨッパラツタリシテオモシロカッタ。岩村、加藤、白鳩ハヨツテカヘレヌノデトマル。自分等ハ信サン自働車デ秀、有島秀武ヲオクリ、宮崎サント三人デカヘリ、スクツカレテネル。

このときの試演に関しては、演出の与志に対し秋庭太郎『日本新劇史』下巻（理想社、一九五六年）が「当時年少二十歳の仕事としては非常な成功といふべきものであつた」「土方のその後における芸術的思想的發展よりする新劇界に残した大きな足跡をみるならば、とまだち座に於ける試みは、土方にとつて頗る有意義なも

のであつたと言へよう<sup>(51)</sup>」と賞賛している。与志にとつても「私は、この夜を劇壇へのデビューと考えて幸福であつた<sup>(52)</sup>」と振り返っているように、「演出家土方与志」<sup>(53)</sup> 出発の日となつた。友達座にとつても演劇史に足跡を刻んだ輝かしい日となつたが、同時にこの日は友達座にとつて終焉の日ともなつた。あとをついだ友達は演劇を共通の場に個々の能力を結集しようとした友達座にくらべ、芸術集団としては求心力に乏しかった。与志は以後一段と演劇への傾倒をつよめ、かつ華族階級からの決別へと向かつていった。近衛は音楽、加藤は美学というふうにはメンバーはそれぞれの目指す方向へ進んでいった。通陽もまた文学、青年団活動、そして一九二二年以降は生涯をかけた事業となる少年団（ボーイスカウト）運動へと乗り出していくこととなる。

### おわりに

本稿を終えるにあたり、友達座がたどつた軌跡をもとに華族とデモクラシーについて考察してみたい。本稿では通陽を中心に友達座の活動を検討したが、彼らはどこまでも純粹であり、悪くいえば世間知らずであつた。その純粹さは、女優公募を機に、自らが属する「華族社会」と、「一般社会」から挾撃を招くこととなつた。前者からは「先進性」が警戒され、後者からは「労働者層」を刺激し、階級間の対立を煽る行為であると批判された。この悲劇とも喜劇ともつかない狭間の状況に対しては武者小路実篤の同情的な手記がせめてもの慰めとなる。もつとも現実の友達座は武者小路が期待するような道は歩まず、分裂、解体していったのであるが。

それは貴族と労働者の救はれない偏見から来てゐると思ひます。貴族の方では貴族の体面、今時に通用

しかねる代物ですが、体面を形式的に何処までも出張する。之が多くの人から反感をもたれる元因ですが、自分達だけが高尚な人間と思つてゐる。それも品位を高尚にすると云ふのではなく、見へや体裁許りを氣にしている。その氣にする動機が我々はとても同感の出来ない程、偏見から来てゐる今時の代物とは一寸見へない、きつと今に消える代物と思へます。君達はさう云ふ代物に頭を押えられるのを同情します。さぞうるさいでせう。

さて労働者の方は、自分達が不当に苦しんでゐるといふ自覚をもちすぎでゐる為に。又今の世ではそれは無理のない処がある。それで貴族のすることなすこと腹が立つ、悪いことでも、い、ことでも自分達だつて境過さへ許せばもつとい、こと、或はもつと面白いことをして見せる。事実或る者は君達よりもずつと不節制で、ずつと快樂の奴隷になつてゐる人もある。しかし現世はさう云ふ根性をたきつけるのに最も適当な時だ。

君達は真面目にやらうと思つても、貴族には真面目なことが出来るとは思はないのだ。私はこのことについては今かく時間をもつてゐない。ともかく君達が今の熱心を持ち耐える許りではなく。もつと益々熱心になつてやつてゆけば、簡単にうはさしたり、反感をもつたりする人が君達のことを忘れてゐる時分に君達はものなり、いかに反感をもつても君達の芝居を見るとよろこばないわけにゆかなくなること(54)を望んでゐる。

最後に、友達座メンバーのデモクラシー認識をみてみよう。もつとも彼らとデモクラシーとの関係はこれま  
でみてきたとおりであり、交流をもつた多彩な文化人の顔ぶれ一つをとつても明瞭ではあるのだが、何より彼

ら自身の生の声として通陽の言葉をきくことで締めくくることにしたい。

又或る人は、デモクラシーの盛んな世の中に貴族が劇の研究をしてはいけなさと云ふ。これは実におかしな云ひ方である。デモクラシーと云ふものと、芸術とが敵同志でもありさうな云ひ方だからである。我々新時代人は最早貴族とか平民とか、そんな肩書なんかを目をくらまされて居るべき秋ではない。貴族だと云つて、いばつたり難有がつたりして、別の人種でもあるやうに考へて来た時代はとつくの昔にもう過ぎてしまつた筈だ。我々はお互ひに一人の「人間」として、よき国民として、又立派な人類の一員として、各自は各自の天分と趣味と境遇とによつて、やれることを力の及び限り、お互ひに助け合つてやるべき秋だと信じる。本統のデモクラットなら、も貴族とか平民とかそんな肩書なんか気にしない筈である。「中略」本統のデモクラットなら、もうそんな肩書なんかに目もくれず、超越して、一人の赤裸々の人間として見て、しかる後のその人間の仕事について考へを及ぼすべきではないか。<sup>(55)</sup>

注

- (1) 伊藤隆『大正期「革新派」の成立』（塙書房、一九七八年）二九八頁。
- (2) 後藤致人『昭和天皇と近現代日本』（吉川弘文館、一九九七年）。
- (3) 後藤前掲書、五〇～五一頁。
- (4) 友達座を扱つた先行研究としては紅野敏郎「白樺」と「演劇」―「白樺演劇社」と「友達座」をめぐる―（『早稲田大学教育学部学術研究』第一八号、一九六九年）がまとまつた唯一のものである。

- (5) 河竹繁俊『日本演劇全史』（岩波書店、一九五九年）一〇六六頁。
- (6) 「三島通陽日記」は一九一四年以降、晩年に至るまでほぼ完全に残されており、少年団、ボーイスカウト運動のほか、政治、文化、芸術など通陽の多彩な活動と華麗な交流を伝える貴重な史料である。日記を含めた「三島通陽関係文書」は、現在は一般社団法人尚友倶楽部に保管され、華族史料研究会が整理にあたっている。史料の利用を快くご許可くださった三島昌子氏の御厚意にあつく御礼申し上げます。
- (7) 『TOMODACHI』のバックナンバーについては土方美恵子氏（夫君は土方与志の次男で演劇製作者の与平氏）よりご提供いただいた。美恵子氏の御厚意に感謝申し上げます。
- (8) 以下の通陽の履歴は、遺稿集「三島通陽」刊行会編刊『遺稿集 三島通陽』（一九七五年）による。
- (9) 三島章道「錦華鳥―小さき思ひ出」（同『愛の雫』へ洛陽堂、一九一六年）四頁。
- (10) 有島生馬「序文」（前掲『愛の雫』二頁）。
- (11) 「Oさんと私」（前掲『愛の雫』所収）のなかで、通陽は「私は小暗い病床に呻吟して居た時より、寧ろ淋しい大磯に遊び盛りの幼い身を冷たい孤独生活の退屈な一日を過ぎねばならぬやうになつてからの方が殊更に、学友等の純な愛のあどけない見舞状が楽のしみであつた。私は交るがはるからくる懐しい学友の手紙を毎日忠実に運んで来る年老いた郵便配達の来る時間を、病み寝た細い首を尚ほ鶴のやうに長くして待ち焦れ、色々の友の優しい慰安の言葉を読むでは、心を遙かに遠い都の空に馳せつ、返事の筆を取るのが唯一の嬉しい日課であつた」（九五―九六頁）と手紙に熱中した模様を記している。
- (12) 「三島通陽関係文書」に残る絵葉書は、未使用のものを含めると三五〇〇通を超える。その一部は平成二十四年度学習院大学史料館常設展「大正の記憶―絵葉書の時代」において展示され、新聞各紙でも取り上げられた。展示された絵葉書は、その後、学習院大学史料館編『絵葉書で読み解く大正時代』（彩流社、二〇一二年）に収録された。
- (13) 白樺派との直接的な接触は『三島通陽』年譜によれば一九一五年頃であるという。実際、通陽を中心に刊行してい

た雑誌『三光』には第四卷第一号（一九一五年一月）より表紙を有島生馬の絵が飾り、雑誌『白樺』の広告が掲載されている。通陽が白樺派に傾倒していたことは小説の雰囲気からも歴然であるが、武者小路実篤は『愛の雫』に寄せた序文のなかで、通陽との関係について、「僕は通陽君の叔父さん（村井弥吉）と同窓で、叔父さんと随分親しくしてゐた。それで通陽君とも小さい時から知つてゐる。否小さい時だけ知つてゐると云ふ方が本当だ」、「二三年前に不意に君の叔父さんから手紙をもらつて君が文学をやる気のあること、三光と云ふ雑誌をやつてゐること、僕に厚意をもつてゐること、僕に逢ひたがつてゐることを知つた。君はもうそんなになつたかと思つた。そしてまもなく君が下二番町の家に来てくれた時、君が大きくなつたのにおどろいた」（五〜七頁）などと記している。

(14) 『三光』発行に伴う収支については、三島章道「Oさんと私」（前掲『愛の雫』所収）のなかに「ある日の事である例の様に学校食堂で騒きながら弁当を頬張つて居るとOさんが何かの話の続きに「君三光は随分損でしょ」と云ふ。

「え、それは勿論、会費つたらね印刷代の十分の一も入りはしないのさ。しかし幸ひに寄附金があるからね、半分位の損でどうにかなるぜ。」（二二六頁）と記している。会計決算報告を毎月載せることとなつた第二卷第六号（一九一三年）によれば、収入は会費が全部で合計三円二〇銭、寄附金が二七円五二銭、これに郵送料の繰越金二四銭を加え総計三〇円九六銭となる。一方、支出は印刷費が三二円五〇銭、郵送料が一円二銭で総計三三円五二銭で、収支の差し引きは一円五六銭の赤字となる。寄附金は通陽の両親が一〇円、親戚の日高夫妻が一〇円、通陽が一円、弟通隆が一円五二銭とほとんど不足のほとんどを三島家で補填していたことになり、到底一般には真似のできないことである。

(15) 三島章道「三光と自分」（『三光』第六卷第四号、一九一七年）五二〜五三頁。『三光』は三島家旧蔵で、現在パツクナンバーは学習院大学史料館に所蔵されている。閲覧に際し同館学芸員長佐古美奈子氏の御厚意に感謝申し上げる。

(16) 土方与志『なすの夜ばなし』（影書房復刻、一九九八年）一一〇三頁。

(17) 土方梅子『土方梅子自伝』（早川書房、一九八六年）四三頁。



(18) 前掲『なしの夜ばなし』二〇三―二〇四頁。土方梅子の回想によれば「兄がポーシャ姫に扮し与志のシャイロックで『ヴェニスの商人』を、武者小路実篤作『わしも知らない』を与志の木蓮、音楽はすべて近衛秀麿さんの担当で上演しました。私は、もちろん熱心な見物人でした。与志は、演技者としては少しくさみがめだった——というのが、子供の頃の私の感想です。しかし、演出者としての彼は力量があると思いました」という（前掲『土方梅子自伝』四二頁）。

(19) 前掲『なしの夜ばなし』二〇四頁。

(20) 「通陽手記」五九頁。通陽の留学話は一九一六年より予定されていたが、実行に到らないままとなっていた。『三光』第五卷第五号（一九一六年）の「編輯室」欄には「私は実は近いうちにアメリカに留学することになって居りますそのうちと云つても来年の中頃でせう。実は今年中に行くことになつて居たのですが、少々都合が出来て延ばしましたのです」（二二頁）とあり、『三光』第六卷第四号（一九一七年）の「三光と自分」では「小さい時からきまつて居りました米留学を愈々今度する事になりました。本統は七八月頃出帆の予定でありましたけれど、紐育は余り暑すぎるからもつと涼しくなつてからの方がいい、からと云ふ人々のすゝめで秋に延しました。たぶん九月中には立ちたいと思つて居ます。しかし家庭の都合でもつとのびるかもしれません、私は早く行きたく思つて居ます。向ふではたぶん法科をやりませんが、側ら文学も研究したいと思ひます。一二年で言葉を稽古してそれから大学に入る考へで、たぶん四五年位居る心算です。はつきり未だきめてありませんが」（五五頁）と述べている。

(21) 三島章道「日記より（私―友達会―社会―のこと）」（『TOMODACHI』第一卷第三号、一九二〇年）六〇頁。以下「通陽手記」と記す。

(22) 河竹繁俊『日本演劇全史』（岩波書店、一九五九年）一〇二七―一〇三〇頁。

(23) 前掲『なしの夜ばなし』二二一頁。秀しげ子については、中田睦美「秀しげ子」のためにⅠⅡ（『論究日本文学』第六五・六八号、一九九六・九八年）。こうした「新しい女」と演劇の関係はあまり知られるところではなく、「通陽

日記」は新たな視角を提供してくれる。

(24) 前掲『日本演劇全史』一〇五三頁。

(25) 友達座に関わる文化人のなかに、亡命ロシア人のチェレミシノフ女史が含まれているのは興味深い。女史に関して増淵宗一「高村光太郎とチェレミシノフ女史」「同(二)」(『日本女子大学紀要 文学部』三三・三四、一九八三年・八四年)を参照。

(26) 「女優に困つて居る公達の友達座」(『都新聞』一九一九年七月三一日)。

(27) 「通陽手記」二六二頁。

(28) 「公達連が組織した『友達座』の女優さん」(『東京朝日新聞』一九一九年九月二三日)。野中花子「友だち座のこと」(『弥栄とともに 故三島通陽先生五年祭追憶集』へ私家版)一六頁。このとき集まった女優のうち、白鳩銀子はその後も新劇、映画での活動が確認できる。彼女の本名は田村智子、陸軍中将田村怡与造の三女で、本間正晴(のち陸軍中将)と結婚したがほどなく別居、離婚した。女優としては伊藤智子の名で知られる。友達座以後の彼女は、小山西薫の引き立てられ新劇座、美術座などで活躍、その後PCLに移り、成瀬巳喜男監督「妻よ薔薇のやうに」をはじめ多くの映画に出演している。(『キネマ旬報 日本映画俳優全集女優編』へキネマ旬報社、一九八〇年)。彼女のたどった数奇な人生もまた「新しい女」の一つの生き方を示している。

(29) 「通陽日記」一九一九年八月三一日条。

(30) 「通陽日記」一九一八年二月四日・八月二〇日条。

(31) 「通陽手記」二六三頁。

(32) 一例として、与志は梅子に対し女性としての自立を求め、「あなたは三島へ遊びに行つてはいけませんよ。実家で親戚の人たちと交際していると、また以前の華族のお嬢さんになってしまいますからね」と言い聞かせていたという(前掲『土方梅子自伝』五五頁)。

- (33) 「通陽手記」 六六頁。与志は九月二二日にも、「劇場ラシテ罰セラレルナラ罰セラレル」と発言している（「通陽日記」同日）。
- (34) 「通陽手記」 六七頁。
- (35) 「通陽手記」 六七頁。
- (36) 伯爵二荒芳徳（一八八六～一九六七）は侯爵伊達宗徳の九男、伯爵二荒芳之の養子となる。妻拉子は能久親王の第五女子。二荒は一九二〇年三月には宮内省書記官兼参事官に就任、皇太子（昭和天皇）の欧州御巡遊の随行し、その後東宮職御用掛として側近をつとめるなどした。通陽とは少年団運動とともに協力しあう人物である。
- (37) 伯爵柳沢保恵（一八七二～一九三六）は、柳沢統計研究所を設立した統計学者で、第一生命保険社長のほか、有楽座の重役などもつとめた。
- (38) 「通陽手記」 六八頁。
- (39) 「通陽手記」 七三頁。
- (40) 「通陽手記」 七三頁。
- (41) 尾崎宏次編『秋田雨雀日記』第一卷（未来社、一九六五年）一九一九年一〇月一日条。
- (42) 「通陽手記」 七四頁。
- (43) 三島章道「編輯後記」（『TOMODACHI』第一卷第一号、一九一九年）八二～八三頁。
- (44) 「通陽日記」一九一九年一月五日～九日。「友達会小品展」（『読売新聞』一九一九年一月一〇日）。
- (45) 土方与志「上場に就いて」（『TOMODACHI』第一卷第三号）九～一二頁。音楽を担当した山田耕作はメーテルリンクを好んだこともあり、つよい意欲をもって作曲に取り組んだ。山田は「私はお影でしばらくふりに嬉しい曲を作り上げることが出来ました。これはあらためて私からお礼申し上げなければなりません。演出に際しての不満はあなたも私も同一の点にあつたと思ひます。それでもあれだけに劇と音楽のしつくりした上演は本場でも容易くは見得られ

ないことだけは憚らずいへます。私は日本の片隅であつた美しい灯が私共の生きてをる間に一度でも点されたことを喜ばずにはられません」(山田「タンタジールの死」と私の音楽」『TOMODACHI』第一卷第三号、七九〜八〇頁)と今回の上演を高く評価していた。

- (46) 『TOMODACHI』第一卷第三号は「試演記念特別号」と題し、宮森麻太郎(英文学者)・沖野岩三郎(作家)・近藤経一(作家)・仲木貞一(劇作家)・瀧井孝作(作家)・秋田雨雀(劇作家)・竹久夢二(画家)・糸井靖之(経済学者)・加藤時次郎(社会運動家)といった錚々たる人物からの観劇評が載っている。
- (47) 加藤時次郎「友達会の試演を観る」(『TOMODACHI』第一卷第三号)九〇頁。
- (48) 『秋田雨雀日記』一九一九年二月五日。
- (49) 例えば竹久夢二は白鳩銀子について「Tajimaをした人の前から勝の線と横顔が大変美しいと思つて見てみました」と絵画的な感想を残している(「タンタジールの死」評」『TOMODACHI』第一卷第三号、三五頁)。
- (50) チェレミシノフ「タンタジールの死」を見て」(『TOMODACHI』第一卷第三号)八七頁。
- (51) 秋庭太郎『日本新劇史』下巻(理想社、一九五六年)三二六頁。
- (52) 前掲『なすの夜ばなし』二一四頁。土方梅子は当日の模様について「与志は『タンタジールの死』を幕間なしで音楽を前奏曲と間奏曲に使い、そのリズムで舞台の流れを統一する演出法をとりました。私は演出家としての与志の腕を、たしかなものと思ひました」(前掲『土方梅子自伝』六〇頁)と述べている。
- (53) 土方与志の演出を中心とした試演への評価については前掲紅野論文を参照。
- (54) 武者小路実篤「友達座」(『TOMODACHI』第一卷第三号)二八頁。
- (55) 「友達座問題に就いて」(三島章道『劇芸術小論集』へ文泉堂、一九二二年)一四〇〜一四一頁。

〔付記〕本稿は二〇二二年五月二六日に行われた学習院大学史料館の第六七回史料館講座における講演「ある貴公子の肖像

像「三島通陽関係文書を手がかりに」をもとに大幅な加除修正をおこなったものである。本稿の作成にあたっては三島昌子氏、土方美恵子氏、ならびに学習院大学史料館より便宜を得た。心より感謝申し上げます。なお本稿は二〇一年度鹿島学術振興財団による研究助成の成果の一部である。